

音順	方劑名	生薬構成 および製法・服用方法
	傷寒論・金匱要略条文	読み および解説・その他
さ一2	柴胡加龍骨牡蠣湯	<p>半夏（辛平）2g・大棗（甘平）2g・柴胡（苦平）4g・生姜（辛温）1.5g・人参（甘微寒）1.5g                      竜骨（甘平）1.5g・鉛丹（辛微寒）1.5g・桂枝（辛温）1.5g・茯苓（甘平）1.5g・大黃（苦寒）2g                      牡蠣（鹹平）1.5g</p> <p>上の11味のうち大黃を除いた10味を水320mlを以って煮て160mlとなし、大黃を加え、更に煮ることを1～2沸騰した時に火から下ろして、滓を去り40mlを温服する。</p>

弁太陽病脈証併治中第六第82条（傷寒論）

「傷寒8、9日、之を下して胸滿煩驚、小便不利、譫語し一身尽く重く、転側す可からざる者は柴胡加龍骨牡蠣湯之を主る。」

解説 傷寒に罹って8～9日では、邪が太陽から少陽に半ば入っているが、未だ裏には入っていない。この様な状況の時に、陽明病と誤って下剤を用いて下してしまつて、熱が更に入り込んで胸が一杯に張る様な苦しさが起こり、精神過敏となつて、ちょっとしたことにも驚き、小便の出が悪くなり、うわごとを言い、身体中がひどく重だるく感じられ、寝返りも出来ない様になつてしまつた者には柴胡加龍骨牡蠣湯が主治する。

傷寒に罹って8～9日では、邪が太陽から少陽に半ば入っているが、未だ裏には入っていない。この様な状況の時に、陽明病と誤って下剤を用いて下したために、津液を喪失して腎陰も少なくなる。すると腎水が心火を抑えることが出来なくなつて、心火が亢進し、心が熱を持つ（心腎不交）。そのために「心は神を主る」作用が失調して、驚き易くなつたり、胸苦しさを訴える。また下法により、正気も虚して、邪熱（邪気）がその機に乗じて一部が裏に入つてしまつて、太陽、少陽、陽明の三陽が共に影響を受けることになる。それにより少陽胆気は鬱滞し、決断力が鈍り、胸滿、イライラなどの症状が現われる。また太陽経の腑である膀胱が邪熱を受け、膀胱の気化作用が失調して小便不利となる。また陽明の燥熱（胃熱）により、うわごとを言う症状が現われる。またこの様に三陽が全て邪気の侵入を受けると、腠理は開かず、陽明は合せず、少陽の流通も滞るので、一身尽く重く（身体が重くて）、転側す可からざる（寝返りも出来ない）ことになる場合には柴胡加龍骨牡蠣湯が主治する。

柴胡加龍骨牡蠣湯は、小柴胡湯が主成分となつており、少陽、表裏に複雑に入り込んでいる邪気を除去する（甘草を除くことにより、邪をすばやく取り除く）。桂枝・茯苓は太陽経の気の流通を良くし、小便を利す。大黃は陽明熱実を瀉し、うわ言を改善する。竜骨・牡蠣・鉛丹は鎮肝胆の作用を持ち、イライラ、驚き易いなどの症状を取り去る。

「方劑決定のコツ」の注釈

下した後で、熱が内臓にこもり胸滿を起こしたのは、その熱が肺に入って起きたもので、すると心にも影響して、虚であれ、実であれ、血に熱を持つと、心煩を生じ、夜は眠れなくなり、熱のために苦しがつたりする。また腎に熱を持つと、驚き易くなり、小便の不利にもその影響が及ぶ。譫語を發するのは、胃に熱が入り上衝して頭を侵すからであり、また肝に熱を持ち譫語を發する場合もある。身体中が重く感じられて寝返りの出来ないのは、下したために、体表の陽気不足に乗じて、裏に熱が多くなり、裏熱が更に裏に入り、裏熱がこもつたために生じた症状である。そして病位は半表半裏にあり、この部分の熱のこもりが強く、裏の熱が表から外に發散出来ない状態である。更に肺熱があれば憂いの感情が強くなり、血に熱を持って実すれば喜び、虚すれば恐れる感情が現われる。肝は怒り、腎は悲驚恐の感情が動ずるのであるが、これらの感情のエネルギーが抑圧されて發散出来ず、筋肉のレベルにこもってしまうのではないかと思われる。

桂枝加龍骨牡蠣湯と柴胡加龍骨牡蠣湯との違いは、

桂枝加龍骨牡蠣湯証は、精神的な症状に虚勞が加わり、感情のエネルギーが表虚によって、發散出来ずに塞がれている。春、夏は気が体表に浮かぶ時期であるので、この証は春、夏に起こりやすい。

柴胡加龍骨牡蠣湯証は、内（裏）に熱がこもり、その原因は筋肉にあつて、そのために感情のエネルギーが發散出来ずに遮られている。秋、冬は体表のエネルギーは裏の方に入って行き（気候的にも熱が内に入り易い）、内臓の働きを活発にする時期であるので、秋、冬に心のトラブルを起した時に起こり易い。

柴胡加龍骨牡蠣湯証

胸苦しい、驚き易い、動悸、小便が出にくい、便秘、身体が重い、以上の様な症状がある場合の心臓病、高血圧症、ノイローゼなどによく用いられる。

柴胡加龍骨牡蠣湯証

新古方薬囊によれば「胸の中に一杯に詰まりたる氣持し、氣落ち着かず、驚き易く、小便の出悪く、うわ言の様な事を言ひ、体がだるく重くして身動きもならぬ者。大病中に此の證を發する者もあり、又は平常の氣鬱が亢じて、此の證を生ずる者もある、便通は大概秘しがちでなり。」と記されている。